

ビッキ ロンドンに出現

朝夕の涼しさが際立つころと暦の上で申しますが、相変わらず暑い日が続いております。お変わりなくお過ごしのことと存じます。旬の果物、梨が届きました。みずみずしくシャリツとした歯応えが快い梨は、疲労回復にいい果物とモノの本にあります。

先日は、札幌大学ロシア語学科（七タコンパ）、ご苦勞様でした。私は木村英明先生のお誘いで初めて出席させていただきました。粕谷さんともゆっくりお話しすることもなく、失礼いたしました。（七タコンパ）に参加した日は、まだロンドンから帰ったばかりでしたので、皆さんとお話することがなかなかむずかしかったようです。行きに十五時間、帰りに十五時間のフライトはさすがに閉口しました。

私事ですが、ロンドンでビッキの作品が展示されることになり、オープニングに合わせて、ロンドンに行つて来ました。道立美術館の砂澤ビッキ展が機で、イギリスのロンドンにある大和証券日英基金のギャラリーでの開催でした。同封した案内状にありますように、六月十六日～八月十日でしたが、ギャラリーが小さく、作品の数も限られたのが残念でした。

砂澤 涼子

私は初めてロンドンに行きました。ギャラリーとホテルの往復でしたが、ロンドンの街を肌で感じる事が出来ました。三十年前に音威子府で制作したイギリスの木彫家、D・ナッシュとの対談もあつたり、実り多いロンドンでした。老体にムチ打つて行つた街でしたが、機会があつたらまた行つてみたい街となりました。ご自愛くださいませ。

補記（編集部）

本文は筆者の砂澤涼子氏の許可を得て掲載した。砂澤ビッキ（一九三一～一九八九年）はフランス文学者の渋沢龍彦とも親交のあつたアイヌ人彫刻家（一九三一～一九八九年）。昨二〇二三年のロンドンでの展覧会については、北海道新聞の以下のサイトを参

照。<https://www.hokkaido-np.co.jp/article/863276/>



さかいただやす

1941年北海道生まれ。慶應義塾大学文学部卒。1964年神奈川県立近代美術館に勤務。同美術館館長を経て、現在、世田谷美術館館長。幕末明治期の美術をテーマとした『海の鎮』『開化の浮世絵師清親』で注目され、その後、美術批評家としても活躍。著書に『若林奮 大になった彫刻家』『鞆に入れた本の話』（以上みすず書房）、『現代彫刻の世界』のサブタイトルをもつ『彫刻の庭』『魂の樹』『森の掬』『彫刻の絆』（以上小沢書店）、『彫刻家への手紙』『彫刻家との対話』『ダニ・カラヴァン』『ある日の画家』『ある日の彫刻家』（以上未知谷）、『早世の天才画家』（中公新書）、『覚書幕末・明治の美術』（岩波書店）、また郷里を描いた寓話集『海にかえる魚』（未知谷）、随想『積丹半島記』（TPH）、『芸術の海をゆく人 回想の土方定一』『芸術の補助線』（みすず書房）などがある。



9784896426687



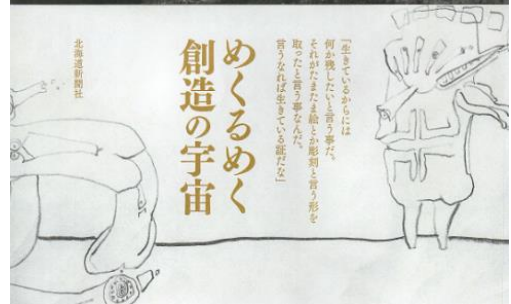
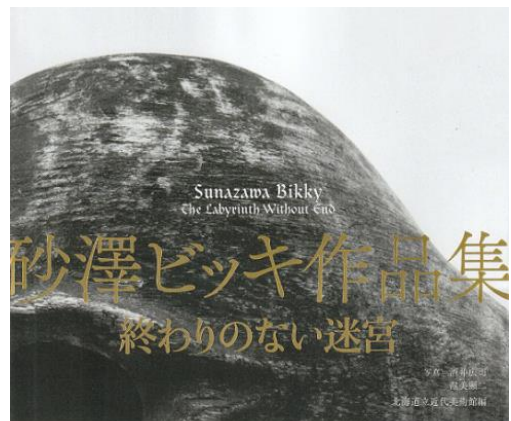
1920071018003

ISBN978-4-89642-668-7
C0071 ¥1800E

定価（本体1800円＋税）

希代の彫刻家砂澤ビッキ——
靈気をも宿す究極の生。樹木
掌と指先とでその木肌に触れ
内に秘められた生命の強りを
作品に込めて人々に提示した
57歳で逝った作家の生と作品
その渾たる姿と共振する一書

この本は、砂澤ビッキとの縁がとりもつ出会いの一端
ひとこまを言いたものである。
一気呵成にかけたらこんな弁解はしないが、貫いた
テーマのようなものではなく、長期にわたってボウリボ
フリとつづつたものである。気風な性分からわたしの
個人的な思いに語られた文章も混じっていて、また内
容も形式も一樣ではないが、総じて語ると随想風に
なっているのではないかとと思う。
……
飛躍した言い方になるけれども、優れた現代彫刻とい
うのは、作者自身が芸術的な感動を誘発すると同時に、
どこか手見のな一面も潜伏させていて、見る者に思索
的なスリルと興奮をあたえるところがある。
この本の刊行は、ある意味で砂澤ビッキの人と作品を
介して、そよした感動とスリルと興奮の一端を、わた
し自身が味わい再確認する機会でもあったと言ってお
きたい。
（もとがとより）



【補記】 札大図書館（粕谷隆夫）

昭和四十七年春、札大に入学した時には、現在の立派な図書館はありませんでした。二号館の地下一階に図書室があるだけでした。しかし、階段を下りると不思議な雰囲気、なにか落ち着いた空気に包まれるのです。責任者の佐藤課長は、ロシア語の先生方から絶大な信頼を勝ち取っており、「あの人がいる限りロシア・ソ連関係の文献は、間違いなく充実していく」と言われておりました。

また魅力的な女性の司書の方々は、皆さん淫漉としていました。横田さん（のちの砂澤ビッキ夫人）、大門さん（のちの「せせらぎ」編集長の福島みゆきさん）、ユーモアたっぷりのAさん、札大女子短期大学部を卒業したSさんなど、いまから思い浮かべると、若い季節の生活がたっぷりありました。

フォークダンスをしている場所は支笏湖。先頭の二人は、大門さんと私です。

